
R.T.S

水深無限風呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R・T・S

【ΖΖコード】

ΖΟΙΖΖΖ

【作者名】

水深無限風呂

【あらすじ】

所謂『目立たない人種』である男子高校生、原木幸人は不幸にも不良を一人死に追いやってしまう。当然脱兎の如く逃げ出した幸人。しかし、逃げている最中に一つの廃工場に迷い込んだことで彼の人生は想像を絶する“本番”を迎えた。R・T・S風邪道ファンタジー。チート要素皆無です、『J注意ください。

「くそつ……」

今日一日だけで百回は越えたであろうこの言葉。

別に誰に向けて言ったワケでもない。今更言つたつて言葉は届かないから。でも不満が無いと言えば嘘になる。

こんな不満だらけの状況に相も変わらずイライラしていると、ガサガサッと再び後ろの方で物音。恐らく何かがうごめいているんだ。最初の方こそ怖かったが、今じゃもう慣れっこだ。むしろ姿を現さないのが嬉しいね、こんな森の中で出てくると言つたら熊、蛇、……山賊すらありえるかもしない。……いや、ここだつたら超巨大な蜘蛛が出てきてもおかしくない。きっと口からは鋼のように硬く、それでいてゴムのように柔軟で、接着剤のように粘り気のある糸を吐き出して、足先には人を五秒で死に至らしめる猛毒があるに違いない。

……ああやだ、そうだと想つと本当に居るような気がしてきた。あの虫みたいな下等生物が持つ特有の何も感じられない無機質な表情でこちらをじいーと見て、襲うチャンスを窺つてる……なんて考えるだけでそこ等のホラー映画より怖い。

「……なんで僕なんだよ……」

空を見ながら再び不満を口にする。別に言おうとしたワケじゃない、勝手に出てくる。

両足は走りすぎて棒だし、気力もない。残つてるのは理不尽に対する怒りと一ヶタ台のSAN値ぐらいだ。あとは近日発売の『テスラクラフト・?』が買えなかつたことへの未練かな。

……『なんで僕なんだよ……』。

本当にそうだ、なんで僕なんだよ。

なんで僕がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ。

他にも沢山居ただろ？ たとえば、バカみたいにクチャクチャ喋つてるDQN共とか、チャラチャラした服装にムカつく喋り方の男共とか、男女平等の意味を履き違えてるバカ女共とか！
ああいう世界にとつて害しかないヤツのがこうなるべきだつたんだ！

それに比べ僕はどうだ？ クラスでも目立たず、趣味はプライベートに抑え、勉強も高水準クラス、運動は……まあ、アレだけど……とにかく、世界にとつて僕が与える害は『気持ち悪い』程度だけだ！

僕を例えれば……そう、僕はアシダカグモだ。三匹家に済ませれば家中の黒い紳士……あるいは最も身近な生きた化石を全滅させてくれる益虫であるアレ。

知つてるかい？ アシダカグモ。

アレは素晴らしい虫だよ。本当に益虫の鏡だ。あの『名前を呼んではいけない虫』が現れた家に颶爽と現れて、Gを全滅させ、人知れず家から去つて行く……まるで仕事人のような虫だ。

……たしかに見た目は気持ち悪いし。さらにはアシダカの名を名乗るだけあつて足がとても長く、サイズもとても大きい。日本で、しかも身近に見れるサイズに限定すれば絶対に最大級のサイズを誇つてゐる。

しかも蜘蛛『攻撃的』という方程式があるが故に害虫と勘違いされる。……それに前途のサイズの問題も有り余つて『タランチュラ的な猛毒を持つた毒蜘蛛』なんかと勘違いされることすらある。

……はあ、本当に僕はアシダカグモだ。

アシダカグモも僕も見た目が気持ち悪いからつて害虫扱いだ。アシダカグモも僕も怖がりで、怖がりで、臆病すぎなほど怖がりな益虫だつてのに。

……なんか自分を虫ケラ扱いしているみたいで気分が悪くな

つてきた。

めうといいき。……ぬくないから

原木幸人は真夜中の森の中で愚痴をグチグチ言ってるか。何で僕

それを説明する」にあす、今日の学校中あたり時間を使ひせなあや
いけない　。

「ネえ、ネえ、キミさあ、ちょっとといい力ナ?」

「オレ達があ、今ちゅーとカネに困つてんだよねえー」

ノミニシナガリ

ああ、最悪だ。

いつもの帰り道が工事で通れない。てんで仕方なく繁華街を歩いていたところ……。

………… 言わなくて分かると思うにと
て そ う な お 兄 さ ん 達 に 捕 ま つ た。

最悪だ最悪だ最悪だ最悪だ最悪だ

「ンあ?
聞いてる?
ネえ」

「え、あ…………えつと…………」

「は？ ナニ固まつてんの？ オレ達困つてんだよ？ ホラ、スコシでいいんだつづーの」

くそ、考える暇もない！

目の前の男達は全員が全員挑発的な視線を此方に向けて一タ一タと笑いつつ僕の全財産を要求してくる。

……スコシでいい？

冗談じゃない、全額持つてくつもりだら絶対！

どうする？ どうすればいい？ 僕は残念なことに喧嘩とは無縁な人間だから殴り合いで勝つなんて無理だ。

喧嘩慣れしてるヤツでも1対3で勝てるかは知らないけど。

「いや、あの……ちょっと……」

「つーかサあ、コイツ、さつきからドモってバツカでキモくね？ あ、もしかしてヒキオタクン？ ハハコ障？ だったら『メンネー！』

「ギャハハハハハハハハ！ オマエ、やめてやれよ！ カワイソウじやん！」

「ソーソー、カワイソウカワイソウ！ ギヤハハハハハハハハ！」

「…………つ…………」

カワイソウ。

心にもない言葉だ、どうせそれは。

……別にそれはいい。コイツ等に笑われるのはまだ我慢できるんだ。

だけど、この騒ぎを横目で確認して、その上で無視して、それでいて心の中で僕を『カワイソウ』なんて考える奴が一番ムカつく。だって、それは僕に本当に同情してる言葉じゃなくて『あんなキモいやツでもカワイソウと思える俺（私）ってホントイヤツ』とか思つての考え方だから。

違う、とか言うヤツでも心の中じゃ絶対にそういう思つてているんだ。僕だつて思つしね。

人は基本的に他人を蹴落とす習性があるから仕方がない。なんてのは十分に分かってはいる。

それでもムカつくモノはムカつく。

「…………あ？ テメエ、ナニ睨んでるワケ？」

……そんなくだらない事を考へてゐる場合じやなかつた！
どうすればいい？ 金を素直に渡すか？ ……渡すか……。
渡すしか……ないよなあ。

お金より身体。これ常識。

「チガウチガウ！ コイツは元々そう言つ人相なんだひ、きっと！
ギヤハハハハハツ！…」

「ああー！ そつかー！ そうだよなー！…「ゴメンナ、ユルして？ ギヤハハツ！…」

前言鉄塊粉碎だ、絶対コイツ等に金は渡さない。

……いやいや！ 何無駄なプライドを抱えてんだよ、僕は！ 素直に渡せ！ 痛いのも疲れるのもヤだろ！？

「……だアーら、何睨んでんだつなんだよツー！…」
「……つツー！」

田の前の不良にぐいっ、と胸倉を掴まれ、引っ張られる。

ああ、終わつた。僕はこの後一、三時間の間殴られ続けるのだろうか。

それだけは絶対に勘弁だ！！ 痛いのは、絶対に、イヤだツ！
そう思えば考える前に行動に移るのが人間。

両手で田の前の不良を強く押す。

「つおつ」

抵抗は無いものだと思つてゐたのか、不良の手は簡単に放れて、
そのまま不良は一メートルほど下がつて軽く倒れる。
やつつまつたあ。もお、だめだあ。ぼかあ、いこで死ぬ。
……バカな似非詫りやつてる場合じやない！…

「てめえ……調子乗つてんじゃねえぞ……、おい、お前等。ソイツ

逃がすな

突き飛ばした不良は明らかにマジギレしてる。更には左右に立つてた不良達が僕の両手を拘束する。

ああああああああああ。

死んだ、詰んだ！

マジギレしてしまった不良は懶に手を突っ込んで何かを取り出そうとしている。

ナイフか！？ バタフライナイフとか！？ 殺される！ 絶対殺される！！

「ぶち殺してやる、……野郎ぶつ殺してや

マジギレした男がナイフを構え、此方に突っ込んでくる。
ああ、終わつたな。ヤマもオチもないつまらない人生だった……。
ギギギイキイイー——ツツと。

潔く諦めた僕の耳に突然の空氣を裂くような音。

光は音より速いはずなのに。

音より後に状況を理解した。

先程まで不良が立つていた位置には白いコンテナトラックが一台横たわっている。

……何事？

いや、考えるまでもない。

さつきの音からして。

コンテナトラックが横転し、そのまま滑りこんできたんだ。

……不良は？

絶対死んだ。死なないはずがない。

「…………あ?…………おい、…………は?」

左右の不良も未だに事態が飲み込めないのか、僕を拘束することも忘れて立ち尽くしている。

チャンスた

不良が死んだ？ 僕には関係ない！ きっと僕以外のヤツにカツアゲしてもアイツは此処で死ぬ運命だつたんだ。

関係ない……！！

たんじやないのか？

.....

実は僕のせいだ。アイツは死んだんじゃないのか？

実は。

條に無關係力條に無關係力

暴れるよ！」足を振り回し、とにかく走り続ける。何処に行くか分からぬけど、離れられているかわからぬけど。走つてないと頭がおかしくなりそうだ。

そんな僕の頬へと冷たい感触。

雨

そう認識した途端に冷たい感触は数を大幅に増やす。

どうやら大雨らしい。

……何処かで雨宿りしないと。風邪引くなんて「ゴメンだ。

そう思つて目を走らせると丁度良さそうな廃工場を見つけた。

……不良が居そうでやだが、居たら居たで違つ場所を見つければいい。

決めたら後は単純、廃工場まで走る。

走る走る走る。脳に酸素を送らせない、考えさせない。現実逃避だ。逃げろ、現実から逃げる。

走れ走れ走れ走れ！
走れ。

「はあーっ、はあーっ……ぐつ、え。げほっ！ っ、かはあーっ、
かはあーっ！ り、無理！ もつ、無理っ……！」

殆ど倒れこむ形で廃工場内に入り込む。

死ぬ、死ぬっ……！

死んじやう……っ！

いつたい何キロ走ったんだ……！？ フルマラソンと同じくらい
は走ったんじやないか……？

どうでもいい、もうどうでもいい、疲れた。疲れすぎた。

何も考えられない、ちょうどいい、今は何も考えたくない。

逃げたい。この現実から。

もう何もかにもがイヤだ。

両親は僕をマトモな目で見ない、学校に友達もいない、理解してくれる人もいない。

楽しみもR T Sリアルタイムストラテジーぐらいしかない。

うんざりだ。

もういやだ。

こんな。

「こんな世界はもうイヤだ、か？」

「ああそりだよ！ もうイヤだ！ こんなせか………？」

無理矢理に勢いよく身体を起こす。

今誰か居たよな！？ 僕に喋りかけてきたよな！？ …… 読心術
も使わなかつたか！？

だ、誰！？ NINJA？！ NINJAか！？

「二つちだ」

バカみたいにキヨロキヨロと見回す僕へと声が掛かつた。
なるほど、そっちか！

勢いよくそちらを見ると真っ白な犬が一匹……、犬？ いや、狼
か？ どつちだ？ 狼……か？

……いや、どつちにしろ危ないだろ！ 僕の頭とこの状況は！
野良犬、あるいは狼だぞ！？ 僕は殺される！ …… というか犬
。『狼が喋る幻聴聞くとか…… 僕の頭はもう終わってるんじゃない
か！？

……あれか！ タつき全然酸素取らなかつたからトランプでもし
たのか。

「安心しろ。お前は普通だよ」

「普通じやないから焦つてるんだ！」

「いや、普通だ！」

「何処が！？ 犬。『狼の声が聞こえるんだぞ！？』

「狼だよ！ 犬つて言うな！ オアつてなんだ、オアつて！ こん
なに凜々しい犬が居たら困るわ！」

「困らねえよ！ それにそんなに凜々しくないし！ ドーベルマン
とかジャーマンシェパードとか見てからモノを言え！」

ああ僕はもうだめだ、犬……じゃない狼と会話してゐる。

……会話できたる！？ 幻聴じやないのか！？

「ふん、 やつと理解し」

「ああ、 なるほど。幻聴だけじゃなくて幻覚も含むさつてるのか。
そうだよな、 こんな場所に狼が居るのはおかしい」

「だから頭ごなしに否定するのをやめろう！」

「いや、 可愛くないし」

「えつ」

「……可愛いと思つてやつたの！？」

「え、 まあ……うん……」

むしろ怖い、 嘸るたびに鋭利な歯が見え隠れして怖い。

……とこりかもつ……僕、 疲れすぎだら。

なんで狼の幻覚見た上にそこそこ萌えを見出せつとしてるんだよ……。

「ええい、 だから幻覚じやないと言つてるだろ！？ なぜ分からん
？！」

「分かつたらもう、 白い翼生えたり、 冷蔵庫になつたり、 工場長になつたりしそうなんだもの」

「ならんわ！ それ以上に意味分からん！」

俺の常識はテメエには通用しねえ。 つて？ はは、 面白くない。
笑えない笑えない。

……しかし此処まではつきりしてるとなんだか触れそうだな。 触
れるのか？ 触れたら幻覚じやないよな……。 そして幻聴でもない、
……いやいや、 まさか…… そんなバカな。

「うん？ 触りたいのか？ 好きなだけ触れ！ ほらー！」

「…………」

「どうした？ 触らないのか？」

……どうじちまつたんだ、僕の頭は……。

落ち着け、もしかしたら幻聴だけかもしれないんだ、その場合に触りに行つたら喰い殺される。

落ち着けー、落ち着けー。

僕は猫派僕は猫派僕は猫派僕は猫派……。

よし、もう僕はあんな狼には惑わされないぞ、ぬこ最高！

「ええい、ネ」なんざ考えてないで早く触らんか！ この臆病者め！

「いいかい、勇敢なと、無謀なのは違うことなんだよ」

「知ってるわ！ ……第一、そこまで怖くないだろ？ ベースはツンデレオオカミだぞ？」

つ、つんでれおおかみだと……？ 冷甘狼ツンデレオオカミ？

なんだそれは……新種か？ いや、もしかしたら新作のアニメか工口ゲかラノベか？ ラノベか工口ゲの線が強いな。
あれか、ヤンデレオオカミとかクーデレオオカミとかもいるのか。狂デレオオカミとかツンヤンデレオオカミとかは勘弁願いたいな。……ああ、ダルデレオオカミがいいかもしない。
多分巨乳だろ。ダルデレオオカミ。

「そんな亞種は存在せん！」

「ツンデレ100%！？ それは話が進まないと思つー！」

「第一、ツンデレというのは地域名でな……」

「地域名だと！？ ツンデレ！？ ツンデレ諸島とかか？！いやいや……なにその工口マンガ島みたいな……。

……ツンデレ、地方名……狼……。

「あんせん、それツンドレしかゃへ、ツンドラや」

……ツンドラじゃね？ いや、ツンドラだろ？

ツンドラとツンドレを勘違いするとほ……デジッ子属性か。
……………ますます僕の頭は終わってるなあ、くわお。

「えつ」

えつ、という言葉と同時に牙がむき出しになる、怖い。

……「イツバカだ。

イヤ違う。

こんなキャラを妄想してる僕がとてもなくバカだ。
バカつて次元じゃない。

もうイタイ。イタイぞ、僕よー アイタタタタ……。

「ああもうー どれだけ私を否定すれば気が済むんだー？ ならス

トレートに行くぞー？ 私はな、神だ！」

「ハハツ、神だつてよ奥さん！ 僕つてばテンプレすぎワロタ！

……わろた……」

「だーー！ ムカつくなこの男ー！ 何が『次に会うときも僕は変わらない』だー！ 初期化されてるじゃないかー！」

どうやら僕の脳内に存在しているこの狼の脳内設定では僕とコイツは前世で結ばれた仲だつたようだ。…………僕つて…………いつたい…………。

っていうか、今更だけど声は可愛いな。…………もしかしてメス！？

「今更か！？ 今更なのか！？」

「あ、メスなのね」

「た、確かにメスだが……ビッちかってこうと女の子つて呼んで欲

「い……かな……」

「いや、無理です大佐」

「何で！？」

「いや、僕ケモナージャないし」

動物を女の子って、無いわ……。

「……というか？ 狼の姿で？『わたしは かみです』とかいわ

れても？ 実感湧かないっていつていうか？……なんで狼？」

「大きな神と書いて、オオカミ大神と読む……、どうだ、上手いだろ？」

「パクリですねわかります」

「ぱ、パクリって……」

「ああもう、帰ろう。家に帰ろう。こんな意味不明な幻覚の相手してられない」

「え、ちょ……」

「あー、ここ何処だか分からぬし……道分かんねえ」

「あ、あのー？」

「……」

「も、もういい……もういい！」

あまりにも自分の幻覚が意味不明なので無視を決めていたら、次第に狼の声が震えだした。

「あれ？ 泣いてね？」

うわ、脳内ペットを泣かせてしまった。まあ、別にいいか。

「お前は理不尽なのが好きなんだろ？ 逆境に燃えるんだろ？ だったら何も説明は要らないな？ つていうかどうせ否定するだろ！？ よし、もういい。好きなだけ現実逃避してしまえ。何かもから目を逸らして逃げ続けるがいいさ！」

……あれ、怒ってね……？

とか思つてゐると、ドガソソッといつ音が僕の真上で起かる。
思わず上を向けば、鉄骨が一本二本落つこちてきている。

アレ、これ僕死ぬんじや。

まさか。

神……？

といつた会話があつたのが数時間前、そしてその直後に僕
は赤い月と青い月が一つ空に並ぶ奇怪な場所……。

所謂『異世界』に飛ばされましたとさ。

ああ、めでたくないめでたくない。きっとこのまま僕、原木幸人はらきゆきひと
は餓死やらなんやらで死ぬだろう。

しかしあ、現実逃避とは……このことか。

よもや現実から逃げた末に異世界に辿り着くとは……。

どういう展開ですか……？ ゾンビんなつたりマスコットキャラ
クターがラスボスだつたりしたほうがまだ理解できる……。
はあ、もう疲れた……。

元々足が棒だつたのに、いっちに飛ばされてからもがむしゃらに
走つたし……。

寝よう。もう寝よう。起きたら全部元通りさ、きっと。
そう思つてゆつくりと目を閉じる。

閉じたと同時に睡魔が思いつきり牙を向いてくる。

ああ、そんなにがつくなつて……すぐに寝るからさ……。

02・イヌマリ約な（前書き）

極めて、イヌマリ的な、何か。

「おー、起きる」

……朝か？

ゆうくつと目を開ける。
そして畳に飛び込むのは、明るい空、そして、畠の前に立つ二つの影。

「起きたか？」

逆光で顔の細部までは見えないが、可愛らしい声を聞く限りじゃ恐らく少女。……ああ、きっと僕の妹だろう。
妹が一人とは……ふふ、僕ってばリア充。
さあ、胸に飛び込んでくるとい。
そう思つて両手を広げる。

ふふ、きっと『お兄のバカ！』とか言いながらドロップキックを

……。

「……は？」

ん？

妹の反応が変だぞ。

いやまた、僕は一人っ子だぞ。……は？

……誰？ というか仮に妹だとしても両手広げたらドロップキックしてくるつて……どんだけアクティブな妹だよ。

相変わらず僕の頭は終わってるな、こんなんだからシンドラオオカミの幻覚なんか見るんだよ、まったく。

「寝惚けているのか？ それとも単純にバカなのか……」「まあ、何にせよ。よく一晩無事でしたね」

は？ 無事？ 何、戦争？

いや、違う。

やはり昨日のゾンビラオオカミは幻覚ではなかつたのだろう。たぶん。

僕の中に生まれたその考えを確かめるべく、空を見上げる。見事に黒い太陽が浮かんでらつしゃつた。

ああ、ああ……。

ようやく状況を理解した、ここはアレだ。

昨日散々グチを吐きつつ寝入つた場所だ。

……黒い太陽つてなんだよ、ファンタジーもいい加減にしちよ。

「……おい、聞いてるのか？」

突きつけられた現実に僕が心を折られそうにしていると、覗きこむ少女のうち、気が強そうな少女が胸倉をグイッと掴みながら顔を覗きこんでくる。

なんと暴力的なんだろうか。いや、それ以上に顔が近い！ 息が当たる！

嬉しい！ ジゃなくて、苦しい！ というか胸倉掴まれると昨日のDOZ共を思い出す！

……軽くトラウマになつてるな、たぶん。……いや、重いトラウマか。

しかしあ、それはさておき。

間近では逆光などあつてないような物で、少女の顔が細部まではつきりと見える。若干刃こぼれした鋭利な刃物のように鋭いのか違うのか微妙な眼つき、あるいは鋭くなりきれない眼つき。整つた顔のパーツの各々のバランス。

恐らく、この少女は可愛いと綺麗の中間あたりだろう。……ちなみに年は推定では十四歳前後か。

なんて風にゆっくりと観察をしていると、不意に襟を放される。

「……いつ、死んでるんじゃないか？」

どうにも死なれたと思われたらしい。

……いや、ソレはおかしいだろ！ 某新世界の神にノートに名前でも書かれて殺されたのか、僕は！？

「隊長はバカですか？ どう見てもまだ生きてるでしょう？」

どうやら、襟を掴んできた少女ではない少女も僕と同じ……ではないだろうが、似たような考え方だつたらしく、襟を掴んできた少女を鼻で笑いながら小馬鹿にするような言動を取る。無論襟を掴んできた少女……もとい隊長と呼ばれた少女は「バカだと！？ バカと言つたか今！？」と激昂しつつ、もう一人の少女に詰め寄るが、もう一人の少女は半笑いのまま、視線をそらしつつ、受け流している。

……隊長と呼ばれていても、そんなに尊敬はされていないようだ。あるいは半笑いの少女の性格がねじくれてるか。

「ふんつ、まあいい……。おいオマエ、自分で歩けるなら私の村で少しは休ませてやる。来るか？」

……いや、なんでだよ！ なんで歩けたら村で休ませてくれるんだよ！？ 単なる親切心なら申し訳ないと思うけど、僕的には震の予感しかしない！

というか歩けなかつたら放置するのか！？ いやいや……歩けないほど重症なのに放置するつて、鬼やん。

っていうか完璧に震じやないか！ だつてもう、歩けなかつたら

放置つて時点で親切心はゼロだろ」こいつ等！

「……もしかして、罷ではないか、と考えてますか？」

そんな疑り深い僕の心情を見透かしたかのよつこ、隊長と呼んだ少女は僕へと語りかけてくる。

……やるじゃない。

絶対立場を逆にしたほうがいいと想つ、この子達。しかしあ、口に出したら何されるか分からぬから言ひはしないが……。

「罷だと思つてゐのなら、それは間違いです。単なる親切心ですから」

断言しよう。

それだけは、それだけは……どんなことを言われても絶対に信じられない、と。

だつてもう……満身創痍つぽい僕を見つけて親切心から村に招こうと思つうんだつたら胸倉摑まないだろ。普通、つていうか絶対。いや、だがどうなんだ……？ もしかしたら……ほら、ちょっと不良ぶつてるけど、実はむつちや親切なのかもしれない。どうするのが正解なんだ……？ どちらだ……？

「いや、でも……、いやあ……。ううーん……」「うーん？」

唸つてみたら。

何故か隊長と呼ばれた少女は思いつきり身を立てる、そのまま後ろにぶつ倒れる。

いや、何？ 僕なんかした……？ いや、してない。

「くふり、くはははははーた、隊長っ、何やつてんですか、す、すつ“じいバカみたい、ですっ！ あははははーー！」

その姿を見て大笑いする隊長じゃないほりの少女。……ああ、この子はきっとなんだうなあ。などと思つてると、隊長と呼ばれた少女は未だに目を見開きながら此方をじつと見ている。

……僕が何をしたってんだい。

「わら、つ、笑うな！ おと、つ、男の声はこゝまで低いもののか！？」

……いや、何処に驚いてるんだよー？ いや、それ以上に驚きすぎだら！？

は？ 何？ 箱入り娘？ いやでもおかしいだろ、男の声すら聞いたこと無いって。

……とこうか僕はそこまで低くないと思つただけど。……低いのかねえ。

いや低くない！ 中学三年で結局声変わりしなくて、合唱の時にアルトにぶち込まれて、男子一人で肩身が狭い思いしたんだから絶対に低くない！

「ふう、失礼しましたね。まあ、あのバカみたいな隊長は放つておいて……、今、どんなこと考えました？ この隊長みて。……バカだと思いましたよね？」

「いや……、男の声聞いたこと無いってどんな環境で育つたんだ、とは思つたけど……バカとは……たすがに……」

まあ、思つたけど。口には出さない。何されるかわからん。意味不明なほど世間知らずな少女だ、いきなり殺しにかかつく

るかもしない。

「ち、ちつさから黙つてればバカバカバカカラつるさいな、お前は！」

と、そこで隊長と呼ばれる少女が隊長と呼ばれない少女へと文句を言つ。いまいちキリッとしない目にたつぱりと涙溜めて。そこまで怖がられると軽く傷つくな。と思ひながら何となく少女の顔を観察していく。

物凄い発見をした。

頭の上で、二つの突起が折り畳められて、小刻みに震えている。ああ、あれは……そうだな。犬が恐怖を感じたときに行う行為だな。

じゃあ、あれ、耳か。

耳……。

!?

待て、耳? ……あ、ああ、所謂犬耳つてヤツか。そうかそうか、なるほど、納得できない。絶対おかしいよこんなの!

いや、落ち着け。

太陽が黒い世界だぞ? 月が二つある世界だぞ? ファンタジーくせえ世界だぞ? だつたらあれは。

そう、あれは……うん。獣人族つてヤツだ。……うん。

「何だ、じつちを見て……気味悪いな」

気味悪い。

正直な感想を言わせて貰えば此方の方が気味悪いわ!

なんだ、その耳は!? 確かに僕は虹絵を見る時に『イヌミミはくあーいいなあー!』とか思つていたが。

実際に見ると……。うん……なんか、違和感。

ええ、イヤ……何？

その違和感を突き止めるべく、『氣色悪い』と言われたことにめげずに、じつくりと観察する。

目線は何度も会うが、無視。何故だ、何が僕に違和感を……。此方がじいっと見ていると、隊長と呼ばれた少女の方は急に顔をそらし、膝を抱えて所謂『体育座り』あるいは『三角座り』のポーズを取つて丸まってしまった。

よく見れば顔を赤くしているし、どうにも恥ずかしかつたらしい。あ、これは少し可愛い……そして違和感も若干薄れる。

なるほど、違和感の正体は不機嫌そうな顔だったか。まあ、そういうだろうな。不機嫌そうな顔してイスミミツけてりや違和感も感じるわ。

……なんだ、あれだな。耳ついてればとりあえず可愛いってのは間違いなんだな。

「うん？……もしかして、フェンリア族を見るのは初めてでしょうか？」

「は？……フィン・ファンネル？ 某起動戦士の？」

「難聴ですか？」

可愛いな、とか思いつつ隊長と呼ばれた少女を凝視していたところ、隊長ではない方の少女が意味不明の言葉を発してきた。

……難聴ですか？ って……。

口悪いな、この子。

「難聴で」

「違うんですか？ いや、違わないですよ。だってフェンリアをファン・ファンネル？ みたいな感じに聞き間違えるなんて……。ちなみにフェンリア族つてのは、世界的に見てもそこら中に雑草のように生息してる魔物ですよ」

雑草のようじ。

話を聞く限り、どうもこのイヌっぽい獣人族達の種族名はフェンリアと言つりし。恐らく造語。あるいはこの世界独自の単語だろう。

しかし、どうにもこの少女は若干毒舌が入っている気がする。……いや、雑草で……。

つていうか自虐じやないか。もしかしたら超ストレートなだけかもしれない。

「お、オマエはまたそうやつて……我等は誇り高きフェンリア族だぞ！？ 雑草つてなんだ、雑草つて！？」

「えーっと。黙つとけ雑草^{ワード}」

「うい、ういーど？」

「北の大陸の言葉で、『雑草』といつ意味ですよ。隊長」

「おお、なるほど。オマエはどうにも死にたいらしいな！？」

英単語も存在するのか、ううん、基本的には僕の元々いた世界と同じで、新しい単語が混じつてる……って感じでいいのか？ どうなんだ……？

まあ別にいいか……。そのうち慣れる。……慣れる前に死にそうだけど。

なんて考えていると、隊長と呼ばれた少女はどうにも雑草扱いされたことが気に食わないらしく、激昂し、立ち上ると同時に毒舌少女へと掘みかかった。なんとも血の氣の多い少女だ。

まさに『犬』。……いや、もしかしたら狼かもしれないけど。

「大体オマエはどうしていつも私に反抗的な態度を取るんだ！？」

「私が何かしたか！？」

「あーあー揺らさないでくださいー、隊長みたいになるうー」

「またバカにしたな！？…………ああ！　もうここ！　で、オマエは来るのか来ないのか、どっちなんだ！？」

ガクガクと揺らされる少女と揺らす少女を見ていたところ、どうやら話題は最初に戻つたらしい。

「うん、どうしたものか……。罷だとしても……なんか、生き残れる気がする。

だけどなあ。…………うーん。

「ああ、死ぬかと思った……。で、まだ悩んでるんですか？　なら、いい情報を伝えてしま jóうか」

「いい情報…………？」

隊長と呼ばれた少女の手から抜け出したらしに毒舌少女は、悪戯っぽい笑みを浮かべつつ、僕へと話しかけてくる。

「いい情報。あれか、バーゲンセールとか。…………いらねえ。そもそも金ねえ。

「実を言えば。私達の村には男が居ませ

「よし、是非とも連れてつてくれたまえ。…………ああ、あと勘違いをするんじゃない。これは別に男が居ないという言葉に釣られたのではなく、男という脅威となる存在が無いことにより、もしも罷だつた場合に僕自身にも逃げる手立てがいくつもあるな、とそこまで計算しつくした上での答えであり、決して、断じて決して！　女だけの村という響きに惑わされたわけではない。もしもこれを小馬鹿にし「やはり女だけの村という言葉に惹かれたんだろ？」などと言ふ輩が存在すれば、その輩は極めて愚鈍かつ矮小。そして何より馬鹿な存在である…………と先に言わせてもらおつ

「あ、はい。別にどうぞ」

ぜんつぜん惹かれてないからな！ まああつたく惹かれてないからな！

「うんうん、本当本当。」これを信じない奴がいれば、そいつは確實に「ミミコ障だね。人を信じることができないなんて最低だ。さあ、行こう。いざ行こう。夢の村、ドリーム・ビレッジへ。勢いよく立ち上がる。足も自然と回復している。うん、夢の村のおかげに違いない。

ああ、ちなみに勘違いしないでくれよ？ 夢の村ってのは休めるから夢の村であって、決して女だらけの村だから夢の村ではない。……え？ 誰も女だらけなんて言つてないって？ 知りません。

「ひや……大き……」

立ち上がった僕を見て再び隊長と呼ばれた少女は目を丸くしている。

……そこまで僕は大きくないぞ。というか何故か卑猥に聞こえる僕はきっともうダメなのだろう。

だがそんな事はどうでもいい！ 夢の村！ 夢の村！

「うーん、この体格差……数で攻めなければ苦しいか……」「それは罵宣言だよね？ 罷つて言つたのと同じだよね？」

毒舌少女は立ち上がった僕を見て顎に指を当てつつ、何かイヤな感じの言葉を呴いていた。

罵かよ。罵なのかよ。いやしかしまあ、うまく立ち回れば逃げるぐらいはできるだろ？ 多分。

体格的な意味で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0167y/>

R.T.S

2011年11月11日20時13分発行